



日本における絶対音感教育の先駆としてのハリストス正教会の合唱指導：研究史の整理を中心に

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2023-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長尾, 智絵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000010

日本における絶対音感教育の先駆としてのハリストス正教会の合唱指導

— 研究史の整理を中心に —

長尾 智絵

北海道教育大学函館校

Choral Instruction of the Orthodox Church Choir as a Pioneer in Absolute Ear Training in Japan:

Focus on Organizing Research Histories

NAGAO Chie

Hakodate Campus, Hokkaido University of Education

概 要

本研究は、日本の音楽教育史における絶対音感教育の先駆がハリストス正教会の合唱指導にあったことを再確認することを目的とする。

日本の音楽教育史では、日本における絶対音感教育は1930年代に突如始まったとするのが定説であるが、その先駆はハリストス正教会の合唱指導にあったということを中村理平氏（1932-1994）が指摘している。そこで氏の著書『キリスト教と日本の洋楽』（1996、大空社）で引用された資料3点をもつ意味を改めて分析する。その結果、氏が最も重要な資料だとして取り上げた「筆者不明」の小論を執筆したのは、山田耕筈の従姉にあたる高橋五子であり、小論は彼女の実体験に基づくものであることがわかった。これによって、筆者を知らないまま中村理平氏が出した、絶対音感教育の先駆がハリストス正教会の合唱指導にあるという結論が、より確かなものになった。

1. はじめに

日本の音楽教育史では、日本における絶対音感教育は1930年代に突如始まったとするのが定説である。しかし、日本近代音楽史では、その先駆はハリストス正教会（以下、正教会）の合唱指導に

あったということが既に指摘されている。正教会の音楽教育が絶対音感教育として先駆的であることを最初に指摘し、その重要性を指摘したのは、中村理平（1932-1994、以下、氏の文献については中村理と記す）の研究である。

以下、中村理平氏の遺稿を含めて出版された『キ

リスト教と日本の洋楽』(1996, 大空社)で引用された資料3点を改めて詳細に分析する。その結果、高橋五子(イネ)という人物が正教会の音感教育の実態を明かす貴重な証言者であることを確認する。さらに彼女の家系と人物像について言及する。これらによって、日本の音楽教育史での絶対音感教育の先駆が正教会の合唱指導であったことを再確認することが本稿の目的である。

なお、引用にあたって旧字体は新字体に改めた。

2. 中村理平(1996)の研究史

ハリストス正教会の聖歌については、「東京駿河台ニコライ教会堂(ハリストス正教)の聖歌隊の四部合唱の如きは既に明治二十年代から優秀なものであった」と堀内敬三(1947, p.237)が述べているように、日本が洋楽を受容した明治期から高度な音楽教育が行われていたことが以前から知られていた。そして中村理(1996)は「最初の日本人ヴァイオリニストも、最初の私立音楽学校も、最初の邦人男女混声4部合唱団もハリストス正教会の組織の中で誕生している」(pp.57-58)と正教会が日本の洋楽発展に大きな影響を与えていたことを指摘している。しかし、「プロテスタント諸派の賛美歌の普及に伴う音楽の大衆化などに比較すると、あまり知られることなく現在に至っており、(中略)本格的な研究もないに等しいのですが、実際には、わが国の近代社会に与えた影響は決して小さくなく(後略)」と述べている(pp.392-393)。

中村理(1996)『キリスト教と日本の洋楽』には正教会関連の論考が講演記録を含めて4点ある。発表順にすると以下の通りである。括弧内のページは『キリスト教と日本の洋楽』におけるページである。

①明治期のロシア正教会とその聖歌(講演)

(pp.392-407)

1991年12月9日『洋楽史再考 讃美歌の歴史的

発展と我国の音楽への影響』

(国立音楽大学特別教育期間講座)

②明治期の日本ハリストス正教会とその聖歌(論文)

(pp.153-168)

1992年1月25日MLAJ Newsletter Vol.13 No.5
音楽図書協議会

③ハリストス正教会と明治の音楽界—洋楽導入者の軌跡 幕末の函館を起点として—(講演)

(pp.550-570)

1993年10月20日函館,金森ホール『洋楽史再考』

(音楽図書館協議会函館研究セミナー)

④「ハリストス正教会」

(pp.57-110)

絶筆

①~④で絶対音感教育との関連を述べているのは、③と④である。また、④は①~③をまとめるための原稿だったと思われるが、残念ながら、完成原稿であったかどうかは今となっては不明である。④では、正教会の音楽教育を概観することから始まり、実態に迫りながら、絶対音感教育と関連していく過程の記述が見られる。

以下、中村理平氏がどのような経緯で、正教会の音楽教育が、日本の絶対音感教育の先駆であることを指摘したのか分析していく。

2-1. 大沼魯夫の証言

正教会での絶対音感教育について、中村理(1996)が最初に取り上げたのは、正教徒であり、音楽評論家としても知られている大沼魯夫(1874-1941)¹⁾の1939(昭和14)年に正教会が発行する『正教時報』28(7)に掲載された記事「正教聖歌に就て」である。

大沼は正教会での指導の様子を以下のように述べた。

「我が日本正教会に於て、完成された聖歌の組織上の歴史を回顧すれば、明治十四五年頃南方口

シヤのキエフ附近の人、チハイヤコフ氏が渡来し、始めてフランス風の唱法ドレミを採用した。何にしる当時は上野音楽学校はまだ音楽取調所と云つて米人メーソン氏が米風を教い、又伊澤校長も之を採用してヒーフミーの唱法で唱歌を教へてみた。この時に我が正教会ではデズ、ベモリ、ベカリ、ドマジョルリヤ、ミノルと云ふ調号を使用した。現今我が日本の音楽教育者達は絶対音感などと新しい発見でもしたように騒いでいるが、我が日本の片隅には、堂々とこの時代の先端を走っていたのである。当時の正教神学校男女生徒は、この絶対音感によりて基本練習を課され、又聖歌班には少なくとも二ケ年間、基本的に精練されて後、其声色を嚴重に区別されて合唱班に編入される制度であった。」(原文ママ、下線筆者による)(大沼1939, pp.25-26)²⁾。

中村理(1996)は、この大沼の記事について、おそらく長縄光男氏の『ニコライ堂の人々』(現代企画社、1989)で知ったのだらうと思われる。というのは、正教会の音楽教育を高度なものにしたと評価されているのは、聖歌教師ヤーコフ・チハイ(1844-1887)であるが、「チハイについては、わが国で重要な業績を残しているにもかかわらず、音楽史関係では、大沼魯夫が書き残したもの、また三浦俊三郎の『本邦洋楽變遷史』などで断片的に触れられているだけで、本格的な研究はまったく行われていません。しかし、近年になって正教会信者の石井秀行氏が『今日のソ連邦』という雑誌に載せた『ヤコフ・チハイについての照会』という文章と、その後の継続研究、さらに石井氏の呼び掛けに応えた形で発表された、日ソ交流史の専門家長縄光男、檜山真一諸氏等の新資料の発掘と研究によりかなり詳しい人物像が明らかになっています。長縄光男氏は、こうした研究成果をまとめ『ニコライ堂の人びと』(現代企画社・1989年・183~189頁)のなかでチハイの肖像をくわしく描いています。こうした先学の業績と僕自身の各地での調査結果を加えて、音楽家としてのチハイの活躍の様子をお伝えしたいと思います。」

と長縄氏の研究を挙げている(p.558)。この長縄(1989)では、先に挙げた大沼の記事を「明治の正教徒大沼魯夫の回想も誇らしげである」と、正教の音楽教育がきわめて先進的だったことや、毎週、東京音楽学校の生徒たちが聞きに来たことを挙げながら紹介されているのである(p.49)。

長縄(1989)は、大沼の記事にある調号などの音楽用語について、「『デズ』以下の調号を今日普通に用いられている調号で言い換えると、順次、シャープ(嬰記号)、フラット(変記号)、ナチュラル(本位記号)、メイジャー(長調)、マイナー(短調)に該当する。いずれもフランス流の呼び方で、ロシアへのフランス音楽の影響のほどをうかがわせるのが面白い」と述べている(p.50)。

一方、中村理(1996)は同じ記事の内容から、「大沼魯夫は自分たちの習った音楽のありかたについてしばしば、文部省の音楽取調掛がヒーフミーの唱法で唱歌を教えていたころ、正教会ではフランス式の調号を用い、絶対音感によって基本練習を行ったことを誇らしげに書いていますが、チハイが函館で正式の音楽教育を開始した明治6年、すなわち音楽取調掛発足の7年前からソルフージュを学ばせていた様子がうかがえ」と述べている(p.560, 下線=筆者)。

ところで、この記事にある「絶対音感」について、大沼がどのような文脈で言及しているのか、少し補足しておきたい。

「正教聖歌に就て」という題の大沼の記事は、1939(昭和14)年6月に京都・大阪で開かれた加藤直四郎(1908-2009)の指揮による正教聖歌の音楽会の報告である。もともと、正教の聖歌とは祈りのためのものであるため、音楽会等で公開されることは少なかった。中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記』(教文館)を読むと、身内で、例えば卒業の送別会等で音楽会を開いたりすることは頻繁にあったようだが、聖歌を公開演奏するといったエピソードはあまり見られない。しかし、1938(昭和13)年2月に大阪放送局で加藤直四郎の指揮による正教聖歌の中継が行われ³⁾、ま

た同年、5月には仙台でも同様の実況放送がなされるなど（仙台ハリストス正教会1982, p.5）公開演奏の機会が続いていた。そして1939（昭和14）年6月、正教聖歌の音楽会が開かれたのである⁴⁾。この音楽会で大沼が解説を書き、さらに、この日の模様を「演唱批評と其解説」として記事にし、正教の「合唱公開は社会的に非常なセーセッションを与ひ、多くの専門家達に驚異の念を起させたことは事実であった」と評価したのである（大沼1939, p.25）。

この記事中で、大沼は絶対音感教育に言及しているわけであるが、その背景には、当時、まだ発表されて間もない絶対音感教育について、公教育に採り入れるべきかどうか、その是非をめぐる激しい議論があった。大沼の言及はそれを反映していることだと思われる⁵⁾。

中村理（1996）は、大沼がたまたま触れた絶対音感についての言及などを根拠に、「函館で始まったハリストス正教会の音楽教育は最初からソルフージュを取り入れた授業をはじめ、絶対音感を重視し、多声部音楽の創出を目標としたヨーロッパの伝統を引く正統的な教育方針が採られました。たとえ宗教活動の一環であったにせよ、西洋音楽をありのままの正しい姿で日本人に伝えた功績は計り知れないものがあります」と述べている（pp.567-568）。しかし、大沼は絶対音感について言及しているものの、その内実について触れていない。

2-2. 三井道郎「回顧断片」

当時の、チハイによる合唱指導の内実を明らかにするため、中村理（1996）が「函館に於けるチハイの授業の様子を伝える記録としては、これまでのところ音楽学生としては落第生であったものの、後に日本正教会の指導者のひとりに成長する三井道郎が『正教時報』に書いた『回顧断片』という文にまさる記録は見当たりません。先の長縄氏も引いていますが、チハイの音楽授業風景の部分を読んでみます。」（p.399）と紹介したのが、正教会を長く支え、ロシア語通訳者としても活躍

した三井道郎（1858-1940）の「回顧断片(1)」(『正教時報』842号, 1960年1月発行)である。

「午後から聖歌の稽古があってヤコフさんはヴァイオリンでド、レ、ミ、ファを復習する事数回、然る後、聖歌の練習をされるのが例であった。私が初めて稽古に参った日、ドレミファの発声を出ないので暫くの間ただ聴いている丈で耳を馴らすようにせよと命ぜられた。つまり声楽には不適當な者として体よくはねられたのであった。先に挙げた松本君や大和田君などは低音のそうそうたる者で、故アレキセイ沢辺神父（その当時十一、二歳の少年）やその令妹ユリヤさん（森田神父令夫人）などは高音で最早立派な聖歌手であった」と、三井は音感が良くなければ聖歌隊に入れなかったという厳しさを語っている。チハイの授業が、当時いかに先進的であったのかについて、中村理平氏は次のように語っている。少し長くなるが、重要なので引用する。

「時期は明治6年の夏、この授業風景は、わが国の洋楽史の歩みを考えるとき、開港地の領事館付属の宗教団体による教育の一環とはいえ、その先進性に一驚せざるを得ません。当時の日本全体の洋楽の状況を考えて見ますと、フランス人のダグロンに指導を仰ぐ陸軍軍楽隊は、まだよちよち歩きの段階を脱せず、一步先行していた海軍軍楽隊といえども、フェントンの指導による数少ないレパートリーをやりくりしての演奏がせい一杯であり、後日洋楽導入の第3の団体になる式部寮伶人たちはまだ練習にも取り掛かっていません。まして文部省の音楽教育の分野では、『學制』に音楽、唱歌の科目が盛り込まれてはいるもののまったく機能していない状態でした。ヴァイオリンの実物を目にした日本人はごく少数であったと思います。その様な中で、ここには正教会の音楽指導の際だった特徴がすでに現れています。」（中村理1996, p.559-560）

2-3. 高橋五子「正教音楽に就きて」

「回顧断片」に続いて、自身の各地での調査によって中村理（1996）が発掘した資料は「正教聖歌に就きて」と題した小論である。資料について中村理（1996）は「明治36、7年頃執筆された」と推定されるものです。この文献は、現在ハリストス正教会一関教会の司祭を勤めておられる小池神父さんからいただいたものですが、僕の知る限り正教会音楽の歴史に触れたもっとも重要な文献です」と、資料にであった興奮を述べている（p.558）。

「筆者不明」として中村理（1996）が、この資料を初めて発表、一部を提示したのは、1993（平成5）年10月20日に函館、金森ホールで開催された音楽図書館協議会函館研究セミナー『洋楽史再考』の講演である（p.570）。「チハイによる函館での唱歌授業風景」の資料として、まだ東京のニコライ堂が完成する前、最初にハリストス正教がもたらされた函館で、聖歌指導を行い、日本の正教聖歌の礎をつくったチハイが「今其一例を繋ぐれば、チハイ氏が、初生徒の発音を試みるや、無名称音階を用ゐて、單に『^ア一』『^ア二』『^ア三』『^ア四』といふが如く、順序を逐ひて七音を出さしめたり。次に有名称音階を示して『^ド一』『^レ二』『^ミ三』『^{ファ}四』『^ソ五』『^{リヤ}六』『^シ七』といふが如く唱へしめしに、生徒は斯く曰はずして、悉く七音の首に『ア』の字を冠らして『アド』『アレ』『アミ』と唱へしが如し、然れども、これ故意に出でしにあらざして、言語の通ぜざると、耳のいまだ開發せざりしによるなり。此の一例によりても、当時我が邦人の音楽思想に乏しかりし一斑を知るに足るなり。斯く困難なりしにも拘らず、其后幾何もなくして、最も複雑なる四重音唱歌を組織するを得たるは、これ全くチハイ氏其人の力なり」という部分を示した（中村理1996、p.570）。

中村理（1996）が「筆者不明」としたこの記事の筆者こそが、後述する音楽家山田耕筰の従姉にあたる高橋五子であった。そして、この記事の筆者を特定したのは中村健之介・中村悦子（2003）である。

中村理（1996）が「筆者不明」とした五子の記事の初出は正教女子神学校が発行していた『裏錦』7(77)、(78)であり、五子の没後に出された『洛沼女史追悼録』に彼女の遺稿として再掲された（p.24-40）。中村・中村（2003）によれば「東京にいた間、五子は教師をしながら寄宿生の世話をし、教会の聖歌の指導をしていた。それに加えて、明治二五年一月から女学校の尚綱社から雑誌『裏錦』が創刊されたので、その編集委員となって活躍した。そして作品発表が半ば教師の義務であったから、毎月この雑誌に文章を寄稿」していたという。（p.392）

中村理（1996）が「僕の知る限り正教会音楽の歴史に触れたもっとも重要な文献です」（p.558）としたこの記事について、中村・中村（2003）もまた次のように高く評価している。

「ロシアの正教音楽を日本へ導入した人びとの来歴や、五子自身の正教音楽に対する考えを述べた小論『正教音楽に就きて』（『裏錦』七七号）も優れている。事実をよくおさえた知的な文章で、ここには五子の音楽へのこよない愛着が感じられる。」（p.393）

なお、この記事に関して、中村・中村（2003）は、「中村理平『キリスト教と日本の洋楽』（大空社、平成八年九月）の第二章『日本ハリストス正教会』には、日本の正教音楽についての初期文献として昭和一四年七月の『正教時報』に掲載された大沼魯夫の『正教聖歌に就て』が挙げられているが、その四〇年も前の明治三二年に、すでに高橋五子が、自分の直接習った初期日本正教会の音楽家たちを心をこめて紹介し、正教会の儀礼に欠かすことができない音楽との関係について思索した、このような論文を書いていたのである。」（p.393）と述べている。

些細なことかもしれないが、補足しておくとして、中村理（1996）は五子の小論を日本の正教音楽についての文献として『キリスト教と日本の洋楽』のp.67、pp.558-559、p.570の3カ所ですでに挙げている。ただ、五子が筆者だとは知らず「筆者不明」とした理由は、すでに述べた中村理平氏がこ

の資料を入手した経緯から明らかである。

ところで五子の小論には、1930年代の絶対音感教育と本質的に変わらないチハイの指導の一端がわかる箇所があるが、それについては T. Сиромого (城元智子) が指摘している (2019, p.27)。それは、チハイが「聴音を敏ならしめんことに務めたり。故に偶氏を訪問する時は、折に触れ事に臨みて、其耳を試みんとせり。たとへば、喫茶の時なれば、茶器に触れしめて、其音の何たるを問ひ、又汽笛の聞ゆるあれば、直にこれを和唱することを命ぜり。是を以て、生徒中には、抜群の人々のみ多かりき」(『裏錦』7(7), p.8) と、常日頃から特定の音高を聞き分け、発声させる耳を鍛えさせていた様子が語られている箇所である。これは、まさに絶対音感をつけさせようとしていることに他ならない。また「抜群の人々」とは、絶対音感かそれに近い音感を持った人々と想像しても、間違いではないだろう。なお、このエピソードは五子の女子神学校(東京)在学中での回想であろう。

中村理平氏は、以上のようにハリストス正教会の合唱指導が「絶対音感教育」の先駆であったという大沼魯夫の証言を三井道郎の回顧、そして高橋五子の記事で裏付けた。

中村理 (1996) は、「函館で生まれたハリストス正教会の音楽教育は最初からソルフェージュを取り入れた授業をはじめ、絶対音感を重視し、多声部音楽の創出を目標としたヨーロッパの伝統を引く正統的な教育方針が採られました。たとえ宗教活動の一環であったにせよ、西洋音楽をありのままの正しい姿で日本人に伝えた功績は計り知れないものがあります。その結果、この例にあるとおり、正教会信者の子弟全体の音感能力を高め、結果的にわが国の音楽文化向上に寄与する人材を数多く輩出することに結び付いたのではないかと思います」と締めくくっている (p.567-580)。

なお、中村理平氏はこの講演の1年後、1994年10月13日に研究半ばで亡くなった。

3. 高橋五子の家系について

ここまで、正教会の音感教育が1930年代の絶対音感教育の先駆であったことを、中村理 (1996) の研究史として、三井道郎、高橋五子の文献から整理した。また、中村・中村 (2003) は、先の小論が高橋五子によるものであることを指摘した。では、高橋五子とはどのような人物だったのだろうか。以下、中村・中村 (2003) に依拠して彼女の家系と人物像について述べる。

3-1. 高橋家の家系

中村らは長きに亘り日本に正教を根付かせた使徒ニコライの研究を重ねてきた⁶⁾。中村健之介・中村悦子 (2003) 『ニコライ堂の女性たち』(教文館) は、日本ハリストス正教会で活躍した女性たちに焦点を当てた研究の成果である。

中村・中村 (2003) によれば、高橋五子 (1866-1929) は福島藩士高橋門次郎の三女として生まれた (p.371)。中村・中村 (2003) が整理した高橋家の家系図 (p.395) は、中村健之介 (1999, p.89) をもとに、門次郎の故郷である板倉藩の資料、松井家を継いだ門次郎の弟、久吾一家が受洗した福島正教会の信徒台帳、五子が後に後継者として継いだ母方の実家である安彦家から聞き取った内容より作成したという (p.553)⁷⁾。

この門次郎の家系を辿ると興味深いことに、以下の図のように、門次郎の妹ひさが、作曲家山田耕筈 (1886-1965) の母であり、五子と耕筈が従姉弟の関係であることがわかる。

ところで、これまで山田耕筈に関する研究では、この門次郎—五子の家系について言及されることがなかった。耕筈の家系について、これまでに言及したのは、稲垣恒夫・岡田洋司 (1985) と渕真吉 (1996) である。以下、その内容を述べる。

稲垣・岡田 (1985) は耕筈の生誕100年を記念し、耕作の姉であるガントレット恒と耕筈の家系についてまとめている。「二人の生涯を前提として、彼らの家系について、二人が、それぞれの自伝の

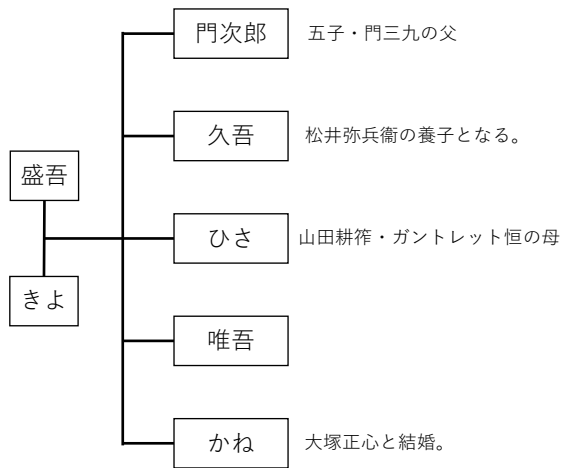


図. 中村・中村 (2003) による家系図
(一部を抜粋・編集し再掲)

なかで述べていることを史料的にあとづけるとともに、いくつかの点について補正することを目的とするものである。」(p.48)と述べているように、耕筈の自伝である『はるかなり青春のしらべ』(長嶋書房, 1957年)⁸⁾と耕筈の長姉であるガントレット・恒の自伝『七十七年の想ひ出』(植村書店, 1949年)をもとにそれぞれ父方の山田家, 母方の高橋家についての記述を整理した。その上で, 父母の故郷である福島市の史料, 当時の遠山音楽図書館が所蔵する耕筈や, 耕筈の母方の祖父である高橋盛(清)吾⁹⁾家の『戸籍』より, 家系を明らかにしているが, 「唯吾・久吾(藤太郎)・ひさの子供があった」(p.51)と, 長男(第1子)唯吾, 次男(第2子)久吾, 長女(第3子)ひさの3人についてのみ言及し, 門次郎についての言及はない¹⁰⁾。

次に耕筈の出自を明らかにした淵真吉は1946年より耕筈が亡くなるまでの20年にわたって, 耕筈のマネージャーを務めた。淵(1996)は「出自表は私の初めての試論であり, (中略)山田家の出自は安城市光明寺の鈴木了仙住職, 郷土史家稲垣恒夫氏らの執筆になる小冊子から私自身が表に作成」したという(p.20)。淵(1996)によれば「盛吾夫妻は三男二女をもうけた。すなわち生年順から挙げると長女『ひさ』(きさ改め, 耕筈の母), 長男『唯吾』, 次男『藤太郎』, 三男『久吾』, 次

女『かね』」(p.32)と, 高橋家の子どもは5人であると稲垣・岡田(1985)とは異なる見解を示した。しかし, 淵(1996)は「この家族構成は必ずしも正確とは断言できぬ。例えば藤太郎については, 明治二年三月の借俸録(御改正前)に式両式人扶持, 盛吾次男とあるが, 三男と思われる久吾もまた藤太郎という別名をもち, 遊兵隊第八級で刈谷の野田村に住み, のち母きよの実家松井善助の養子となっている。次男藤太郎と松井善助養子久吾こと藤太郎とは, 同一人物か否か, 今後の究明を待たねばならぬ。」(p.32)と家系を整理しきれない状況を吐露している。さらに, あとがきでも『『出自』の章にしても, あれは全く諸資料の前に五目ならべよろしく私独自に組み立てたもので, 本文中にもふれているように, 私の試論である。いうなれば叩き台である。今後, あの崩れ落ちそうなささやなか踏み台を基礎にして正しい系譜が作られんことを願うためである。』と述べている(p.268)。

中村・中村(2003)が示した家系図では, 高橋盛吾夫妻の長男は「門次郎」であり, 「山田耕筈とその姉ガントレット恒子の母ひさは, やはり五子の父門次郎の妹で, (中略)つまり五子にとってはもう一人の叔母であった。」と門次郎一家と耕筈とが親戚関係にあったことを明らかにした(p.395)。

3-2. 高橋五子の人物像

では, 五子とはどのような人物だったのだろうか。中村・中村(2003)によれば, 五子は生涯を正教会の活動に捧げた人物である。12歳で福島正教会にて両親らと共に受洗し, その後, 弟の門三九と上京し, ニコライの女子神学校へと進んだ。成績は極めて優秀だったという。卒業後は女子神学校で後進の指導にあたり, 後に京都に開校した京都女子神学校の校長となった人物である。五子について特筆すべきことは, 彼女が「音楽や語学に並外れた才能を持ち」(中村・中村2003, p.369), ニコライの信頼も厚かったことであろう(同上, p.370)¹¹⁾。特に音楽については, 中村・

中村（2003）が「女学校在籍中の五子は学力優秀な上に非常な努力家であったから、いつも級の一、二番であった。彼女は数学、書道、そして音楽に早くから非凡な才能を発揮した。音感がよかったので女学校時代から教会の聖歌隊のアルトの好歌手として活躍」したこと（p.385）、1895年からは「ニコライのはからいで、来日して間もない哲学者ラファエル・フォン・ケーベルにピアノを習うことになった」ことに触れている（p.389）。ピアノの技術は聖歌隊のレーゲント（指揮者）として生かされたようだが、後年には教え子の家でピアノのレッスンをするなどしていたようだ（p.392）。このようなことから、中村・中村（2003）は「もしもニコライが音楽を学ぶために（五子を＝筆者）ロシアに留学させていたら、どんなにすばらしかっただろう、とつい想像する」と述べている¹²⁾。五子と長年、同僚にあった児玉菊子（女子神学校校長）は五子が亡くなった後に発行された『洛訥女史追悼録』で「音楽の才能は喉よりも耳の人で、^(ママ)忽ちアリの好歌手となった」と述べている（pp.9-10）。音感が要求される正教の聖歌で、良い耳を持っていたということがわかる証言である。

4. まとめ

「僕の知る限り正教会音楽の歴史に触れたものも重要な文献です」と中村理平氏が述べた小論「正教音楽に就きて」の筆者が高橋五子であることが明らかになったことで、小論が持っている説得力と臨場感が五子の実体験に基づいたものであることがわかった。これによって、筆者を知らないまま中村理平氏が提示した絶対音感教育の先駆はハリストス正教会の合唱指導にあるという結論が、より確かなものになったといえる。

ところで、中村・中村（2003）は、1881（明治14）年のニコライの福島巡回の際の、門次郎、娘の五子、その弟門三九の出会いを記している。福島では、その数週間前に火事があり、焼け残った門次郎の家で信者たちは祈祷を行っていた。ニコ

ライはそこで聖歌を歌った子どもたちについて「斉唱ではあるがびっくりするほど声がよくそろっていた」と褒めているとニコライの日記を引用している。この子どもたちこそ、門次郎の娘、五子と弟、門三九である（p.379）。五子の音楽体験の原点である。

謝 辞

本研究はJSPS科研費 JP22K13635の助成を受けたものです。また、本研究に当たっては、城元智子氏より有益な助言を頂きました。深く御礼申し上げます。

注

- 1) 大沼は1887（明治20）年に駿河台の正教唱歌学校に入学し、そこで7年あまり音楽を学んだという（中村理1996, p.60）。
- 2) この大沼の証言はハリストス正教会の音楽教育の実態を示すものとして、たびたび引用されている。詳細は長尾（2019）注58を参照のこと。
- 3) この放送については、ハリストス正教徒であり、作曲家の高木東六（1904-2006）が正教会の機関誌『正教時報』で賞賛している（高木1938, p.23）。詳細は長尾（2019）を参照されたい。
- 4) 加藤直四郎による音楽会についての詳細は長尾（2019）を参照されたい。
- 5) 絶対音感教育についての議論については、菅（2013）「1930年代の笈田光吉を中心とした絶対音感教育の系譜—東京市の尋常小学校に於ける絶対音感教育の展開—」（音楽教育史学会第26回発表資料）を参照されたい。
- 6) 本研究では、中村健之介監修（2007）『宣教師ニコライの全日記』全巻（教文館）、ニコライ著・中村健之介訳編（1993）『明治の日本ハリストス正教会』（教文館）等を参考にした。
- 7) 中村（1999）の家系図の門次郎の家系以外の部分は、『福島民友新聞』に掲載された高橋昭佳「山田耕笹の母ひさ」に拠ったとのこと（p.89）。
- 8) 耕笹の自伝は、後藤暢子他『山田耕笹著作全集』3巻（岩波書店、2001）によれば、まず『若き日の狂詩曲』が1951（昭和26）に大日本雄弁会講談社から発行され、その後、同じ内容が『はるかなり青春の調べ』と改題して長嶋書房より再版された。
- 9) 文献資料により、清吾とも、盛吾ともある。中村・

- 中村（2003）は「当時はチョンまげを切るときに改名することが多かったから、『清吾』と改名したのは明治維新以後ではないか」と述べている（p.374）。
- 10) 稲垣・岡田（1985）が根拠とした盛吾および耕筈の『戸籍』が公的な資料として最も信頼に足るものと考えますが、今回、日本近代音楽館（当時は「遠山音楽図書館」）に、この『戸籍』について問い合わせたところ、耕筈の『戸籍』（＝戸籍の写し）は所蔵されているものの、個人情報観点から閲覧はできないとの回答だった。また盛吾の『戸籍』については、今のところ不明である。
- 11) ニコライは1897（明治30）年6月4日（＝ロシア暦）の日記で「ナデジダはその精神と行ないにおいてほんとうの修道女であり（何度、彼女に縁談があったことか！しかし、神にその身を捧げるといふ彼女の決心は揺るがなかった）」と綴っている。中村健之介監修（2007）『宣教師ニコライの全日記』4巻，p.374，教文館。
- 12) ニコライは、同じくハリストス正教徒の金須嘉之進（1867-1951）を、ロシアに音楽留学させた経緯がある。詳しくは中村理（1996）、城元・北原（2017）を参照のこと。

- 館。
- 中村理平（1996）『キリスト教と日本の洋楽』大空社。
- 長尾智絵（2019）「加藤直四郎と日本ハリストス正教会の合唱」北海道教育大学紀要（教育科学編）69(2)，pp.219-228。
- 測眞吉（1996）『楽聖 山田耕筈を囲む人々』赤とんぼの会。
- 堀内敬三（1947）『音楽五十年史』鱒書房。
- 三井道郎（1960）「回顧断片(1)」『正教時報』842，pp.6-7。
- 山田耕筈（1996）『自伝 若き日の狂詩曲』中央公論社。

（函館校准教授）

引用文献

- 稲垣恒夫・岡田洋二（1985）「ガントレット恒・山田耕筈の家系に就いて」かりや郷土研究史7，pp.48-61。
- 大沼魯夫（1939）「正教聖歌に就て」『正教時報』28(7)，pp.25-31。
- 後藤暢子（2014）『山田耕筈—作るのではなく生む—』ミネルヴァ書房。
- 城元智子・北原かな子（2017）「金須嘉之進と『帝室附カペーラ声楽院—東北地方におけるキリスト教受容に関連して—」青森中央学院研究紀要28，pp.31-44。
- T. Сиромото（城元智子）（2019）「О СТАНОВЛЕНИИ СИСТЕМЫ РАЗВИТИЯ МУЗЫКАЛЬНОГО СЛУХА В ЯПОНИИ」МЕЖКУЛЬТУРНОЕ ВЗАИМОДЕЙСТВИЕ В СОВРЕМЕННОМ МУЗЫКАЛЬНО-ОБРАЗОВАТЕЛЬНОМ ПРОСТРАНСТВЕ, 22-32。
- 仙台ハリストス正教会（1982）『仙台教会の歩み』。
- 高木東六（1938）「感想」『正教時報』27(4)，p.23。
- 高橋五子（1899）「正教音楽に就きて」『裏錦』7(77)，pp.1-9。
- 高橋五子（1899）「正教音楽に就きて（続）」『裏錦』7(78)，pp.1-13。
- 中井木菟麻呂（1930）『洛訥女史追悼録』（非売品）。
- 中村健之介（1999）「宣教師ニコライ下総巡回日記」千葉県史研究7，pp.52-92。
- 中村健之介・中村悦子（2003）『ニコライ堂の女性たち』教文館。
- 中村健之介監修（2007）『宣教師ニコライの全日記』教文

